発禁詩集補遺

発禁詩集にかぞえられたもののすべてがすぐれた詩集とはいいがたいが、時代との関係で、何かの意味をもつものとなっているのは、権力によって嫌悪され、禁止された、という成行きに意味があるということである。だから明治大正と昭和の戦前のすべての発禁詩集について、触れなければならない義務があることを発禁詩集について語る者としてそれを思わぬではないが、私はそのうちから幾つかのものを割愛した。

第一の理由は、前に連載したときは発禁詩集として数えたが、再考してみると、必ずしも発禁詩集というにはふさわしくないという場合がある。たとえば林一郎の『原始経』である。この一冊は二十篇の詩と、その四倍に及ぶアフォリズムから出来ており、厳密には詩集とはいいかねるのではないかと私は考えた。しかしこの本には特長がある。そのことを私は前にこう書いている。

「『原始経』発禁の理由は社会の安寧秩序を害するというところにあったが、それは左翼的

階級的であることよりも、あまりにもあからさまな原始憧憬即ち現実否定の強烈さから来ているようである。この一冊から無気味にあふれ出る奔放な想念と情感は、流露を越えて奔騰する。伝統的で支配的な社会道徳や習慣への反逆性は、特定の詩篇とか、アフォリズムのどの部分などというよりも、原始なるものへの傾倒から発して現実の諸権威を否定する叫びと聞かれる、そのことが忌避されたのである。」

萩原朔太郎が「林一郎とその著書」という、林の面目躍如たる一文を残している。林は発禁(大正十五年五月)になったとき五部だけ手許に保管しておいた『原始経』の一冊をたずさえて、あちこち人を訪ねたそのある時、朔太郎の家に行き、

「座敷に通すといきなりつかつかと進んできて、初対面の挨拶もしないうちから馴々しくアグラをかいて話しかけた。『やあ君』『どうだね』という調子なのである。僕はすっかり面喰った。」

といった風に朔太郎をびっくりさせたらしい。林の場合はそれが別段のてらいではなく、彼の日頃の調子であった。林は明治三十七年に大阪に生れ、高知高校に学んで幸徳秋水に親近感を抱き、後上京して宮嶋資夫、岡本潤らのアナキストと往来した時期もあったが、それ以上アナキズムに投ずるということもなかった。処女出版の『原始経』が禁止されて挫折せしめられなかったら、という思いが、その彼のバイタリティを回想するとき、ふと立還って来る。検閲制

度による犠牲といわざるを得ない。

もし詩集としての純度で『原始経』を発禁詩集から落すなら『荒村遺稿』はどうか、ということにもなるだろう。まったくそうである。そう思いつつ林一郎の『原始経』をこうして紹介するのである。

次に、今度の場合大体において翻訳の詩集を除外することにした。さしたる意味はない。ロレンスの『恋愛詩集』やジアンヌ・アランの『ジアニインの歌章』については私にそれを紹介するほどの、原著にたいする理解が欠如しているから、遠慮したまでで、巻末の書誌に記すにとどめた。

概して訳詩集の禁止は風俗壊乱を理由とするもののようであるのはおもしろいことである。秩序紊乱を理由としての訳詩集の禁止がなかったことは、おそらく偶然のめぐりあわせであろう。大正十四年ごろに出た『燕の書』（エルンスト・トルラー、村山知義訳）のごとく、当時のどの日本の詩人のものよりも重くはげしい思いを、その当時の青年たちに与えた訳詩集が禁止されなかった幸運は、おそらく検閲官の詩にたいする理解未熟の故ではなかったかと思われる。『燕の書』に直接的な反逆や政治的観念的な叫びがなかったからであろう。そしてこのことは、ひるがえってわが国の詩書への検閲が、解放運動とのかかわりの深さ、直接さ、すなわち活動的な組織とのかかわりで禁止するという現実的な配慮に左右されることの多かったことを

思わせる。

秩序紊乱を圧殺するために左翼詩が弾圧される中に、すぐれた詩集のあることは当然ながら、政治的活動とのかかわりでそれほどでもない詩集も又、雑魚のトトまじり的に禁止されることはなかったかと、懸念されたこともある。

しかしながら概してプロレタリア詩の方はそのことはすくなく見える。発禁詩集の跡を辿ってみれば、そういう結論となるようである。むろん、すぐれて力量のある左翼詩人の詩集が禁止されるとはかぎらない。時期にもより、詩の表現形式にも、名声の与える影響力によることも、ないとはいえない。総じて左翼系の詩の、反軍、反戦、反国家、反権力、あるいは不敬事件的内容に抵触するものが禁止されたことは、個々の詩集の場合、解明したところである。

比較的無力で、美しくもなく、詩史的に意義も低いにかかわらず、すなわち詩集としてさほどのものとは思われないが、ただ非文学的な猥せつのために発禁詩集に数えられるにいたったものもある。

『春宮美学』といった詩集などがそうしたものであろうかと思う。戦前何ごとも自由の少なかった時代に、盛り場のうす暗いところで、意味ありげに勿体をつけて女の裸体写真など売る手合がいた。その写真の実物は、美しくもなんともないことを除けば、語るほどのものでもなかった、というあれに類するエロ本みたいなものまでも、昔は必ず、ワイセツ性の僅少さのなか

で、禁止されることがあった。そういう詩集については、発禁処分を受けたという事実があっても、あまり問題にしたくはない。物好きな蒐集家ではないからである。

そのこととすこし形はちがうが、太平洋戦争敗北の翌年か、翌々年に堀口大学が『乳房』という詩集を出したことがあった。定価百円だったかと思う。岡本太郎が表紙とさし絵をかいていた。あれを「発禁詩集」といいたがる人がいる。私のところへ、そういって来た人もあった。だがあれは戦後すぐの、アメリカ軍の占領時代で、あの程度の詩集などが禁止になるということのなかった時期であった。春画までにも行かぬエロ小曲集を、禁止する者はないだろう。その本に「発禁」云々がうわさされるのは、発禁になるほどの中味があると暗に喧伝しているようなもので、興ざめもはなはだしいことである。

ここで詩集『過去』（西山克太郎）について是非語っておかねばならない。かつての連載のときに私はこの詩集について次のようにかいたことがある。

「この詩集が発禁の厄にあったのは昭和十四年九月のことであった。支那事変が、日本大勝利の声とともに拡大の一途をたどっていたころであった。

私が手にしたこの詩集には、おそらく彼（西山）自身の戦後の記述かと思われる『過去・後記』が挟まれてあり、そこには

『従来、詩人の単なる感覚的部面のみが強く押し出されたもの（市民的芸術の最前衛として

の空想的シュル・レアリズム――左翼アジ・プロ芸術としての〝コップ〟系プロ芸術）に対しての理智主義芸術としての、科学的超現実主義の立場として本集所収の作品はかかれている。』

という自作の立場の解説みたいなものがあった。これはそのすこし以前にわが国の詩人の動向を二分していた『詩と詩論』のモダニズム派と、プロレタリア詩とを超える狙いをもつものだということのようである。

なお西山はこの詩集の発禁以後に高橋玄一郎、竹中久七、藤田三郎らの雑誌『リアン』の同人として検挙され、『リアン』の芸術主張たる「唯物史観ニ立脚シテ、過去ノ感覚形態『ブルジョア芸術』ヲ革命シ、主トシテ社会的・政治的素材ヲ対象トシ、之ヲ弁証法的理智主義的観念形態構成法ニ依リテ表現スル所謂『リアン』芸術ナル革命理論ヲ展開シ」（長野地裁予審終結決定書、昭一八・一一）たということが、当時の非合法の日共を通じてコミンテルンの目的に資せんとする、という嫌疑によって起訴されたのであった。つまり詩集『過去』が、共産主義宣伝のおそれありとして禁止されたのであったことは、これで明らかである。」

「現在、三十年前のこの詩集について思うことは、よくこれほど綿密に『リアン』の人々が、シュル・レアリズムとプロレタリア芸術理論の超克統一というカクレ蓑的理論をつくり

上げ、それをまた神経過敏この上ない日本の官権が、〝共産主義ナリ〟と断定するまでの過大誇張の追及を敢えてしたものだということである。

詩集『過去』の詩には、たしかに作者の心情に、共産主義、あるいはソ連とその国家状況への信頼がうかがえる。だが、表現に手がこんでいるほどには、直接的表現のプロレタリア詩にくらべて、リアン・グループが主張する社会的政治的素材を対象とし、それを〝弁証法的理智主義的観念形態構成法デ表現スル〟ことに成功しているとは見えない。」

すでに支那事変の時期には、この僅かばかりのソ連への傾きも（そのときは日ソ不可侵条約締結後いくらもたってなかった）共産主義運動の非合法につながるものとして見逃されなかった。これをいいかえれば、この程度の詩をかくにも、抵抗の意識を内に秘めていなくてはならなかったのである。

昭和十六年になって、『ナップ七人詩集』（昭和六年刊）と白須孝輔の『ストライキ宣言』（昭和六年刊）がことあらためて禁止となった。二つとも刊行後まる十年たってからの発禁であった。戦争がはげしくなっては、以前に許したものも見逃しはならぬということ、これは又考えてみれば、「権力」の方のあわてた処置だということであろう。いわゆる国家総動員法の下で戦時体制が急激に強化され、言論の統制がきびしくなったことを現わしている。

なお触れておきたいものとして、昭和八年の森山啓詩集『隅田河』がある。この詩集は組版

中に破壊されて陽の目を見なかった、という。その片鱗は彼の詩集『潮流』に編入されている。また高橋新吉の『雨雲』が昭和十三年に禁止されたことを記しておきたい。

思えば詩集の発禁などということも、すこぶる政治の動向とかかわるもののようである。いつどうなるか、何がどう変更されるかわかったものではない。いま検閲制度がなくて詩集など平気で、とてつもないものが出ているとしても明日のことはわからない。明治からの発禁詩集のことを少しばかり回想してみた上で、その思いが、平和憲法の下であらためてふかまるようだ。

（70・9・14）

書誌

明治

『社会主義詩集』・児玉花外。明治三六年八月。社会主義図書部・金尾文淵堂共版。復刊『社会主義詩集』昭和二四年十一月。日本評論社。B6版、二二六頁（「同情録」併録）、一八〇円。

『荒村遺稿』・松岡荒村。明治三八年七月。編集発行白柳武司。四六版上製。一六三頁。松岡君を憶ふ（白柳秀湖）。余は如何にして君を知りたる乎（木下尚江）他。非売。

『社会主義の詩』・堺利彦編。明治三十九年四月。由文社。菊半截紙装。本文一三一頁。五銭。

『俗体詩』・岩本無縫編。明治三九年七月。盛光堂発売。菊半截、紙装。七八頁。十五銭。

『天風魔帆』・児玉花外。明治四十年一月一日。平民書房発行。菊半截布装上製。本文一五二頁。三十五銭。

『諸国童謡大全』・童謡研究会（橋本繁）編。明治四十二年九月。春陽堂発行。四六判上製。序泉鏡花。本文九九四頁。九十銭。

大正

『月に吠える』・萩原朔太郎。大正六年二月。感情詩社、白日社出版部刊。四六版上製。さし絵田中恭吉。例言三〇頁、本文一九八頁、跋一五頁。九十銭。

『労働詩集・どん底で歌ふ』・根岸正吉、伊藤公敬。大正九年五月。日本評論社発行。菊半截上製函入。堺利彦序、本文一八三頁。一円。

『日本社会詩人詩集』・福田正夫編。賀川豊彦、白

鳥省吾、百田宗治、加藤一夫、富田砕花、福田正夫共著。大正十一年一月。日本評論社刊。四六判上製。本文三七四頁。二円三十銭。

『泰西社会詩人詩集』・福田正夫編。福田正夫、白鳥省吾、百田宗治、富田砕花共訳。大正十一年一月。日本評論社刊。四六判上製。本文四二八頁。二円五十銭。

『二足獣の歌へる』・松本淳三。大正十二年三月、自然社刊。四六判紙製。序生田長江。本文八四頁。一円。

『土墻に描く』・内野健児。大正十二年十月。耕人社（朝鮮大田）刊。四六判。序川路柳虹。本文一九九頁、一円六〇銭。

『夢と白骨との接吻』・遠地輝武。大正十四年七月。ダダイス社刊。四六判紙製。序中西悟堂、村山知義装。本文三七頁。定価記載なし。

『太陽崇拝』・長岡輝子。大正十四年十一月。二松堂書店発行。四六変型判フランス装。本文二七一頁。一円二十銭。

『労働監獄放浪より』・後藤謙太郎。大正十五年四月。後藤謙太郎遺稿集刊行会発行。四六半截。本文一三六頁。五十銭。

昭和

『プロレタリア詩集』・一九二七年版。日本プロレタリア芸術聯盟編。昭和二年十一月。マルクス書房発行。四六判紙装。本文四五頁、二十銭。

『ジアニインの歌章』・ジアンヌ・アラン原作・外山卯三郎訳。昭和二年六月。東京詩学協会発行。菊判和綴。本文七五頁。特製限定五十部。五円。

『一社会人の横断面』・手塚武。昭和三年二月。銅鑼社発行。半紙半截判。ガリ版・四十頁。二十銭。

『過去』・西山克太郎。昭和四年九月。信州星林社（飯田市）刊。四六変型版。一八頁。五十銭。

『労農詩集』第一輯・全日本無産者芸術聯盟編。昭和三年七月。マルクス書房発売。四六判紙装。本文五八頁。序三好十郎。三十銭。

『無産者詩集』・下川儀太郎編。昭和三年。全日本無産者芸術連盟静岡支部発行。四六版紙製。本文四五頁。二十銭。

『アナキスト詩集』・鈴木柳介編。昭和四年五月。アナキスト詩集出版部発行。四六版紙製。五十二頁。三十銭。

『プロレタリア歌曲集』・無産社編・刊。昭和五年六月。四六版紙製。本文三六頁。三十銭。

『プロレタリア詩集』一九二八年版・日本プロレタリア作家同盟編。昭和三年五月。マルクス書房発行菊半截紙製。本文一一八頁。四十銭。

『プロレタリア詩集』一九二九年版・日本プロレタリア作家同盟編。昭和四年七月。戦旗社刊。菊半截紙製。本文一七二頁。四十銭。

『日本プロレタリア詩集』一九三一年版・日本プロレタリア作家同盟編。昭和六年八月。戦旗社刊。菊半截。本文一六九頁。四十銭。

『泥』・伊藤和。昭和五年十一月。ドロ社発行。菊判紙装、ガリ版。本文四九頁。三十銭。

『中野重治詩集』・中野重治。昭和六年。ナップ発行。四六版上製。一八〇頁。一円。（昭和十年ナウカ社版あり）

『黒パン党宣言』・中浜哲。昭和六年五月。渓文社。四六版三分ノ一型。ガリ版。五銭。

『小さい同志』・槙本楠郎、川崎大治編。昭和六年七月。自由社発行。四六判上製。装幀、扉絵室順治。一二四頁。七十銭。

『赤い銃火』・日本プロレタリア作家同盟編。昭和七年四月。日本プロレタリア同盟出版部発行。四六判紙装。本文六〇頁。十銭。

『南海黒色詩集』・起村鶴充編。昭和七年十一月。新創人社（松山市）刊。四六判紙製。本文六二頁。跋・宮本武吉。五十銭

『戦列』日本プロレタリア作家同盟編。昭和八年二月。日本プロレタリア作家同盟出版部発行。菊半截紙装。本文六三頁。十銭。

『痩土に燃ゆる』・大杉幸吉。昭和八年十一月。解放文化連盟出版部発行。四六判紙製。五四頁。定価

四十銭。

『**罰当りは生きてゐる**』・岡本潤。昭和八年二月。解放文化聯盟刊。四六判変型紙製。飯田豊二装。本文八〇頁。五十銭。

『**都会の眼**』・能登秀夫。昭和八年七月。文学表現社刊。菊判上製函付。本文八七頁。定価一円。

『**野良着**』・加藤吉治。昭和八年九月。無肥料地帯社。ガリ刷・四六判。本文五四頁。三十銭。

『**松ケ鼻渡しを渡る**』・田木繁。昭和九年二月。日本プロレタリア作家同盟関西地方委員会出版部（大阪）。四六判並製。本文四六頁。十五銭。

『**廃園の血脈**』・定村比呂志。昭和九年三月。詩の仲間社刊。四六判紙製。序・白鳥省吾、国井淳一、鈴木勝、土屋公平。本文一〇八頁。八十銭。

『**辛抱づよい者へ**』・松田解子。昭和十年二月。同人社書店。四六版並製。本文一二一頁。五十銭。

『**土塊**』・上村実遺稿。昭和十年十月。詩の仲間社発行。判紙型・ガリ版。序詩岡本潤、あとがき・滝蓮太郎。本文五〇頁。略暦・清水清。

『**恋愛詩集**』ロレンス（足立重訳）。昭和十一年三月。三笠書房刊。四六版上製。本文二一九頁。一円五十銭。

『**百万人の哄笑**』・世田三郎。昭和十一年五月。時局新社刊。四六判紙装。一二七頁。五十銭。

『**帝国情緒**』・鈴木政輝。昭和十二年十月。書物展望社刊。四六版上製。本文四二五頁。序萩原朔太郎。二円五十銭。

『**雨雲**』・高橋新吉。昭和十三年四月。版画荘発行。四六判上製。本文一六一頁。一円五十銭。

『**ナップ七人詩集**』・中野重治編。昭和六年十二月。白揚社刊。四六版紙製、三四一頁。一円二十銭。（昭和十六年三月発売禁止）

『**ストライキ宣言**』・白須孝輔。昭和五年二月、紅宝堂発行、四六版フランス装、序・蔵原惟人。本文六十八頁。五十銭。（昭和十六年三月発禁）

『**青狐**』・火野葦平。昭和十八年五月。六興商会出版部発行。A五判並製。本文一三二頁。あとがき中・山省三郎。二円二十銭。

あとがき

一九六七年七月から翌年にかけて日本読書新聞に『発禁詩集』という連載をしたことがある。小寺和夫君にもっとも多くの資料供給を得て約五十回に亘った。

そのときは同紙上に別に自叙伝をかいていたために、大寺謙吉というペンネームを用いた。いや大寺でなく小寺謙吉であった。というのは、そのペンネームを、昔自分たちのやっていた同人誌上の、共通のある名前をふと思い出して、咄嗟に、大寺謙吉とそうきめたのであったが、『発禁詩集』連載の第一回が出てみると、「小寺謙吉」ということになっていた。どうせ仮の名だからと思い、その連載にかぎって、小寺謙吉でとおすことにした。

その連載で一つ心のこりだったのは、毎回のスペースが一定していたために、詩集それぞれの歴史的比重によって簡素の区別が十分というわけにはいかないことであった。

もう一つ、何ということもなく、連載欲といったようなものに誘われて、的確に詩集とはい

いがたいものまでが、そこに並んだというきらいもなくはなかった。たとえば本来、遺作集とでもいうべき、散文と詩を半々とか、ずっと詩のすくないものまで発禁詩集にかぞえたというようなこと。それらを整理した上で、詩集の歴史的軽重も考え、発禁詩集による詩史（とまではいかずとも、時代的変遷といったようなもの）というようなものを、考えて見たかった。

その思いは決して十分に果されなかったけれど、そのようなつもりで、この『発禁詩集』一冊をかいたのである、ということを、一言つけ加えておきたい。

詩集が発売禁止になるなどということは、ほとんど偶然である。しかし亦極めて必然性の多い運命を伴ったものも中にはある。私はその必然に発禁となる運命をになった詩集についてこそ述べたかったのである。そこに詩集をとおして民衆の歴史というものが考えられるかもしれないと思う。

（一九七〇、九、一六）

発禁詩集

秋山　清
1905年，福岡県に生まれる。
著書，評論「文学の自己批判」「ニヒルとテロル」「竹久夢二」「アナキストの文学」「近代の漂泊」・詩集「象のはなし」「白い花」「ある孤独」「秋山清詩集」
現住所　東京都中野区鷺ノ宮6－8－28

昭和45年11月25日発行　©　　¥ 680

著者　秋山　清
発行者　小島米雄
印刷所　白泉堂印刷株式会社

発行所　〒160
東京都新宿区坂町23番地
電話東京(357)3261(代表)
振替・東京69107
株式会社　潮文社

落丁本・乱丁本はおとりかえします　　(千代田製本)

(分) 0292 (製) 1015 (出) 4664

ロナルド・セス
武田勝彦
松浦勝男 訳

死刑執行人

ソヴィエト秘密警察の実態

欠席裁判、誘拐、処刑—恐るべき忍耐と巧妙さで「体制」の敵を次々に抹殺してゆく秘密警察—スメルシュー社会主義国ソヴィエトとは何か。本書は鉄のカーテンに覆われたその真相を究明している。

¥ 480

N・カーレフ著
小田川研二 訳

富豪と貧民窟

ソ連記者が見たアメリカ

資本に毒される政治、横行するギャング、根強い人種差別、繁栄の蔭にうずくまる貧民街など—巨大な資本主義の国アメリカの暗黒面を告発したソ連記者の見聞録。前書とともに体制と人間を考察するための貴重な資料である。

¥ 480

上田都史 著

性の博物誌

この厳粛なるドラマ

性とは何か—それはそのまま生きるとは何かということでもある。俳人である著者がその歌ごころに映じた様々な性の姿態を通じて、生きる意味をたずねた生の讃歌である。

¥ 480

武田勝彦 著

キャッチフレーズ100年

秘められた日本人の心

明治以来一〇〇年、日本の企業や商品の謳い文句を時代的社会的な背景の中で浮き彫りにし、そこに潜む日本人の心のヒダに照明をあてている。キャッチフレーズという独自な視点からみた日本人の心の歴史と批評である。

¥ 480

坂本二郎他

70年代を考える

空前の繁栄が語られる中で迎えた70年代。高度成長の前途、豊かな社会の中の生き甲斐、国家目標と政治のあり方など、山積する問題をめぐって行われた各界のリーダー13氏の討論。NHK特別番組の記録である。

¥ 480